# 青年新島襄とH・S・テイラー船長

伊藤彌彦

## はじめに

私たちは完結した新島襄の生涯を知っている。その新島襄が偉人であることに筆者も少しも異論はない。しかし、偉人を前提にして、時間をさかのぼって彼の人生を眺めると、出来事を「所与性」としてとらえ、生涯を自己完結的な統一体として連続性のもとに解釈しがちになる（歴史解釈における有機体的発展）。

それでここでは「青年新島」を前提にして、未知の深みに飛び込んだ人生（launch out into the deep）としてとらえる。すると、未来はつねに「課題性」として彼の前に存在していた。そこでは非連続性、矛盾を含みながら、飛躍や転化の契機を経て人間成長としての連続性、統一性を形成したのであった（歴史解釈における弁証法的発展、三木清「有機体説と弁証法」『三木清全集』三巻、参照）。

新島襄の生涯には、離藩脱国という人生を決定的に方向づけた期間があった。元治元（一八六四）年三月十二日〔旧暦〕、江戸湾から函館に向けての船出に始まり、一八六五年十月十一日〔新暦〕にアメリカ入国を果たすまでの期間である。そこには快風丸、ベルリン号、ワイルド・ローヴァー号での船上生活があった。

偶然訪れたチャンスを逃さず、快風丸乗船工作に成功して江戸を離れた日から、アメリカに入国するまでの一

年半の間に起こった経過は、いわば二段式ロケットのように進行した。一段目は江戸から函館までの時間、これは江戸社会から離脱して主体的自由（自分の人生を自分で作為することの始まり）を得る飛躍、新島自身の言葉を使えば藩からの「脱櫪」であった。二段目は函館から密航してアメリカに入国するまで。ベルリン号とワイルド・ローヴァー号のなかで人格の成長、内面性の成熟がなされた時間であった。

さてこの期間に新島襄が書き残した文章には、「函館紀行」「航海日記」と英文「日本脱出の理由」の三つがある。しかし前二つと最後の一文、中でも「函館紀行」と「日本脱出の理由」は、その内容があまりにも違うので驚かされる。同じ人物の書いた文章に、なぜこれほどの違いが生まれたのだろうか。これまで「日本脱出の理由」は、後年記された*My Younger Days*（「私の若き日々」）との比較で論じられてきた。本稿では「函館紀行」「航海日記」と比較する。

なぜこうも違うのか。この三文章が同一人物のものであるとすると、そこには、芋虫が蝶に変身する「変態（メタモルフォーゼ）」のような、破格の意識変革、パーソナリティー（人格）の「飛躍」があったと見ざるを得ない。航行中の船内生活のなかで、なにが、いかに起きたのだろうか。とくに目立つのは「日本脱出の理由」において語られるキリスト教信仰に関する告白である。そこには事実の誇張がかなり含まれている。しかし単なる入国するための便宜的言説でなかったことは、その後の彼の人生が証明していたと言えよう。

これらの考察のために、関連する以下の手記や書簡にも目配りしておく。

関連手記

「函館脱出之記」元治元年六月十四日（『新島襄全集5』）

「箱楯よりの略記」一八六六年二月二十二日アンドゥ府にて（『新島襄全集5』）

関連書簡

菅沼錠次郎宛　元治元年三月十一日（『新島襄全集3』）
新島民治宛　元治元年四月二十五日（『新島襄全集3』）
飯田逸之助宛　元治元年四月二十五日（『新島襄全集3』）
新島民治宛　元治元年四月二十五日（『新島襄全集3』）
新島民治宛　元治元年六月十四日（『新島襄全集3』）
Fukushi Unokichi宛　上海にて　一八六四・八・九（『新島襄全集6』）
Fukushi Unokichi宛　上海にて　一八六四・八・一〇（『新島襄全集6』）
新島双六宛　一八六五年（『新島襄全集3』、書簡番号13）
新島双六宛　一八六五年（『新島襄全集3』、書簡番号14）
新島民治宛　一八六六・二・二一（『新島襄全集3』）
新島民治宛　一八六七・三・二九（『新島襄全集3』）
新島襄宛 飯田保〔逸之助〕書簡　慶應三年六月十七日（『新島襄全集9』）

## 「函館紀行」

手記「函館紀行」の冒頭には、偶然に近いチャンスを捉えて周到な乗船工作を成就させた経緯が縷々記されている。工作はまず快風丸を所有する本家松山藩から乗船許可を得ることに始まり、成功すると「疾走する事飛ぶが如く」安中藩邸に戻り、上司飯田逸之助氏を動かして安中藩主工作を依頼。藩主の内諾を知ると、「喜欣に堪

えかね覚えず大声をして曰く、嗚呼天我を棄てざるか、我業の成否この一挙にあり」と喜びの声を発した。ちなみにこの一節は、かつて蘭学修得の特待生三人のうちの一人に選ばれ「勉学指向型」青年になっていたのに、藩主が替わったことで、その夢が次々と消えていった「絶望の安政五年」の対極をなす。青年新島の人生が明転した瞬間であった。父親に対しては、上部組織の許可という「ノー」といえない状況を作った後で函館行の話を持ち出したのであった。

## 政事風俗の探査

安中藩大目付は、新島の修学許可願の「算学」を「兵学」に、つまり「航海兵学之科術研窮」とさせたうえで承認した（新島民治「伜稽古修業一件」）。そして修行料として十五両を貸与した。新島の主目的は函館で武田斐三郎の英学塾に行くことであったが、函館までの道中では航海兵学上の探索も実行していた。次の飯田逸之助宛書簡では、平城（たいら）址や城下の情報収集の様子を報告している。

「安藤侯の居城、平を見物致し、その日城下に一泊。政事風俗の探索仕り、尽く日記に止め居き候間、帰府の上御覧に呈すべく、且つ別に平城の略図差し上げ候間、御照覧遊ばさるべく候」（元治元年四月二十五日　飯田逸之助宛）と。ここで注目されるのは、函館でこの手紙を認めた四月二十五日段階で「帰府の上御覧に」と、江戸に戻ることを予定していたことである。

なおこの城下町を探索中、「馬奴（ぼと）城下を往来するに尽く口紐を緩め、且ツ軽荷物或は荷物無ければ必らず其馬に乗り行き、士人の来を見れど一切下らず。故に我等厳く下れ下れと云て、而後、彼渋々と馬より下る。予此を見て法令の不厳を知る」（『新島襄全集5』、一四頁）と記す。他藩を旅行中ににもかかわらず、下馬しない馬奴

を叱る新島たちの姿は、まさに徳川社会における士族の秩序意識丸出しである。

## 花街、芸娼の記述

また「函館紀行」には総州勝浦、奥州磐前郡仲之作、南部鍬ヶ崎、函館薬師山麓山之上の四か所の花街の記述がある。総州勝浦では、難航した快風丸から無事上陸した解放感から、酒肴と芸娼二人を呼び、地下〔冥土〕からの生還に祝杯をあげたと詠う。ただし甘言のうらで芸娼が獗猖だとも記した。函館薬師山麓山之上の花街については、一転して厳しい。「これ男子の足を容るべき地にあらず。如何となれば此所の靡毒、他所より別して性悪しき由」と。ニコライ僧侶からに梅毒の話を聞かされたのである。

問題は、南部鍬ヶ崎での経験である。「函館紀行」では「予上陸し、伊勢屋清兵衛の家に宿す。予鍬ケ崎の様子を見るに驚くべき事あり。如何となれば、家毎に妓二、三人、或は四、五人あり。且つその総計三百人余に至る由。これ商船の出入り多きに依るなり。…この地の人物、陽〔男〕は粗にして陰〔女〕は獗猖なる事甚だし。これ悪むべき風俗」と記した。この地の女ははなはだ「獗猖」、ど厚かましかったのである。かなりの金子を奪取されたのであろう。この後の手記が、何者かによって「一丁裏から次丁表にかけて各約三分の二」切除されている（『新島襄全集5』、一五頁）。上司飯田逸之助宛書簡には「南部鍬ケ崎港に着、宰丸を延ばし申し候。…去り乍ら青年者の為には宜しからざる所にて、六、七百の戸口に商人は十分一に満たず、余は尽く娼家にて候。…」とタメ口で書く。

だが翌朝、鍬ヶ崎を出帆する時の情景描写は、「この日朝は快晴なりしが、離別の涙雨か、陰雨濛々として降り、転た離別の情をして切ならしむ」と、新島にしては珍しく、まるで歌謡曲の一節のようで、別れを惜しむしっぽ

りした感想を残した。彼もまだ若い青年なのである。

## 所持金のこと

ここで函館修学時の新島青年の所持金のことをまとめてみよう。「函館脱出之記」の中に、日本脱出時の財布のなかを総括して、「不用の品物を売払ひて取得し金子二両二分、且つ我が持ちし金一両二分なる故、総計嚢中の金子四両なり。扨予家を出る時ハ二十五両の金子を持ちしか、海路に長く日を費やし、時ニ港の怪物に奪取られ、今は如此困窮し、物件等をうりよふやく四両の金子にあり付けり、嗚呼我なんぞ金に縁なきや」（『新島襄全集5』、七〇頁）と記している。

新島は藩から俸禄をもらっている身分であったが、前述したように函館修業にあたってはさらに藩から十五両の修業料を貸与され、出発時、懐には二十五両持っていた。一両を六万円に換算すると現在価格にして一五〇万円になる。大金である。ところが密出国する頃、財布のなかにはわずか一両二分しか残っておらず、私財を処分してやっと四両にして乗船していた。当時の貨幣単位は四進法で、一両が四分、一分が四朱である。したがって一両二分は九万円にあたる。三月七日に江戸を出発して、六月十四日に函館を脱国する三カ月の間に、一五〇万円を九万円に減らした。所持金の九四パーセントが消えていたのである。

今まで誰もこの事実を指摘してこなかったが、国外脱出を決意した裏事情として見過ごしてはならない。皮肉な見方をすれば、このままでは藩にも親にも会わせる顔がない。外国に行くしかないと考えたのではないだろうか。父親宛には「さて諸品の高価なる事、江戸の倍位に御座候。それを恐れあまり買物等を致さずば、却って暮らしの為に宜しきかと存じ候」（元治元年四月二十五日）と函館の物価高を伝えただけであった。

どこで金を失ったのか。「函館紀行」には、武田塾の菅沼精一郎ら三名を料理店に誘引し、酔いの回った頃を見図って「西洋人の食客」になりたい旨の相談を持ちかけ、僧官ニコライの情報を入手した。このように情報収集のために有効な使い方もしていた。

しかし大半は「港の怪物に奪い取られ」た、と考えられる。特に「南部鍬ケ崎港に着、睾丸を延ばし申し候」とある辺で失敗したのであろう。要するに大金を持った青年新島七五三太は、世情にうとい、ウブな青年でもあった。こうしてみると新島は最初から聖人のような人でなく、また石部金吉金兜のような無粋な人物でもなく、世間並の青年武士だったと思われる。

「函館紀行」の中で、脱国と直接つながりそうな記述は少ない。わずかに見られる気配は、ロシアの建てた病院システムに感心して西洋文明の水準の高さを知ったこと、そして武田塾の田中茂幸木（会津藩）が消息不明になったのを、「但この人英商デウスの家に至り英語を学びし故、この人に便り英国に至りしならん」と推測した点である。なお後者は四月二十五日の記載である、父・民治と上司・飯田逸之助宛に書簡を書いたのと同じ日である。いずれにせよこの手記には、キリスト教や信仰に関する記載も気配もまったく無い。

所持金に関しては、新島襄はわずか四両を懐に日本を出国した。そして十年後には五千ドルの学校建設資金を持って帰国するのであった。

## 渡米直後、キリスト教的禁欲倫理の青年に成長した姿

なお新島襄の名誉のために付け加えておけば、函館行きの道中で遊んだことを深く後悔し反省し、過ちを繰り返さなかったことである。アメリカに着いて間もなくの手紙には、弟新島双六へ「観音〔浅草観音〕の北に当た

り八丁土手に続きたる一地〔吉原遊郭〕は、忠臣孝子の嫌うべき所に御座候間、決して彼の地へは徘徊せぬよう」（新島民治宛書簡　一八六七年三月二九日）と忠告する。

またフィリプス・アカデミー生徒の品行に比べて日本の書生を「我が朝放蕩の諸生、酒をのみ自ら英雄とか称し、世間の人を見下げ豚犬とか呼び、親兄弟を蹴付け、情の知れぬ女郎になじみ、遂に靡毒（梅毒のこと）に染まり、…」と批判したあと、「少子も昔の七五三太〔襄の幼名〕と大いに違い、」（同書簡）と記していた。つまり新島青年には失敗に学ぶ修正能力があった。最初から、聖人君子だったわけではなく、自己を律する近代人に成長していったのである。

## 国外脱出の船旅

新島青年は元治元年六月十四日（一八六四年七月十七日）深夜、命をかけてベルリン号に乗り密出国した。元治元年七月九日（一八六四年八月十日）、上海で、米国に向かうワイルド・ローヴァー号に乗換えた。一八六五年七月二十日、その船は目的地のボストン港に入港したが、新島襄が船を下り確実にアメリカに入国できたのは一八六五年十月十一日のことであった。

金も持たず難民状態での密出国には、出国時、船中生活、入国時の三つの難関があった。ベルリン号での二十五日、そしてアジア諸港で交易しながらアメリカに帰るワイルド・ローヴァー号内での一年余り、二つの船内での約一年三カ月を、新島襄は外国人の下で労働しながら過ごした。密航船内の新島青年の内面に何が起きたであろうか。昆虫に例えれば、芋虫が蝶に羽化する時、「さなぎ（蛹）」という動きの少ない巣ごもり期間がある。外界から隔離された密航船内の時間と空間は、青年新島を旧世界人から近代市民に、封建士族から文明市民へ脱皮

させるいわば「蛹の時間」であったと言えるのではないか。船中の様子を「航海日記」から眺めてみる。

## ベルリン号で切れかける

ベルリン号乗船七日目の「航海日記」にはこうある。

六月二十一日　ソアンデー〔実際はサタデー〕晴（中略）

今は襦袢三枚を洗う。我れ家に在りし時、自衣を洗わず。然し今は学問の為とは申しながら、自から辛苦を知るは、これ又学問の一と諦らめり。去り乍ら、父母をしてこの辛苦をしらしめば、必らず四行の涙、潸々ならん。

吾れ今、言語通ぜざる故、空しく支那人の指揮を受けり。然し他年、彼等をして豚犬の如くならしめん。

慨然たるに堪えず、偶然一詩を得たり。

自従辞函楯　空被役洋人　　函楯を辞してより、空しく洋人に役せらる。

憂国還憂国　憤然不思身　　憂国また憂国、憤然として身を思わず。

（「航海日記」『新島襄自伝』岩波文庫、一〇四頁）

この青年は、生まれて初めて自分の衣服を洗濯したことに強いこだわりを見せていた。封建武士の常識では、洗濯のような肉体労働は女子、小人〔身分の卑しいもの〕の仕事とされ、新島もそれを当たり前と思っていたのである。また、この日中国人の指揮下で肉体労働をしたことにも強い屈辱感を持った。それに対しては将来、彼

らを「豚犬」のように見下してやると心に誓う。新島の意識は偏狭な民族意識でいっぱいであったといえよう。

さらにこの日、有名な「憂国」の漢詩を書き残した。これを作った裏事情については、後年、こう書く、「ある乗客がいた。彼がアメリカ人なのかイギリス人なのか、私には分からない。…彼はとても親切に接してくれることもあったが、時には私を非常に乱暴に扱った。ある時、何を命令されたのか分からなかったために、私は彼から殴られた。私は激怒し、仇を取るために日本刀を取りに自分の部屋に急いで駆けおりた。刀をつかみ、まさに部屋から飛び出そうとしたその時、胸に湧きあがってくるものがあった。…この程度のことに耐えられなければ、どうして重大な試練に立ち向かうことができようか…」と（「私の若き日々」『新島襄自伝』岩波文庫、六六頁）。

洋人に殴られた時、武士の面目丸つぶれで、思わず刀に手をかけようとする士族根性丸出しの新島青年があった。人格破綻寸前、刃傷沙汰に及びそうな自分を制し、なんとか憤怒を漢詩に托して精神のバランスを保ったのである。自分には「憂国」という高貴な使命があると思うことで、屈辱を我慢した時の漢詩である。もしこの時、新島が切れていたら、セイヴォリー船長はとんでもない奴を乗船させた、と下船を命じ、今の同志社も存在しなかったであろう。

翌日の「航海日記」も陰鬱である。

六月二十二日　半晴

吾れ思う、今日、船、右舷紀州地方に当らん。午時左舷東方に一の島を遥かに見たり。この島如何なる名なるを知らず。

甲比丹（カピタン）一切書を教えず。外に一人有りし故、この者に教授を頼みしが、甲比丹同様、貪欲鄙劣の者なる故、

七つか八つの語を聞き、且つ一語三、四度も教え呉れしに、真似出来ざれば怒声を発し、或は鼻と頤(あご)に手を掛け、口を開きて、「doと云え」と申せし事もこれ有り候。

英語を習おうとしても船長は教えてくれない。もう一人の洋人に聞こうとしたが、無礼にも自分の顔をつかまれ、"do"と言われた。こういうわけで新島はフラストレーションの真只中にあった。

難民状態で乗船した誇り高き武士が、乗船一週間にして、船中で異文化接触を体験し、カルチャーショックの波状攻撃にさらされていた。ストレスの原因を挙げてみると、一、言語不通、二、襦袢の洗濯、三、中国人や洋人に命令される、四、学問の不振、発音学習の困難、五、他人に顔を触られる、ということになる。こういう密航中の船内生活の始まりであった。

ただし新島襄にとってベルリン号船内のすべてが敵対的だったと見るべきではない。セイヴォリー船長は新島に何点かの洋服を与えており、それなりの気配りをしてくれていた。むしろベルリン号での二十五日間は、旧世界の封建武士が十九世紀西洋文明と正面から文化衝突を起こした時間、手荒い西洋世界のオリエンテーション期間であった。

## 聖書を読む

ところで乗船十一日目、の元治元年六月二十五日(一八六四年七月二十八日)の箇所には聖書の記述がある。「航海日記」に初めて現われたキリスト教の記述である。

「今日セーロル〔セイラー〕より借りたる耶蘇経典を読む事、少し計りなり。実に帰郷の上、再び父母に逢い

たる心地、恰もかくの如きかと思われ、心の喜び斜めならず」（『新島襄自伝』岩波文庫、一〇六頁）と。

聖書をセーロル（船員）から借りた、ということは、英語学習欲の他にキリスト教に関心があったことが分かる。そして英文聖書を開いていた。この段階での新島の英文聖書の読解能力には疑問があるし、ましてどの程度の信仰を持っていたかは謎である。しかし目を通した聖書から、故郷に帰郷して父母に逢ったようで非常にうれしいと感じていた。ベルリン号乗船以来、殺伐とした日々のつづいたなかで、聖書によって心の安らぎ得たことは確実で、聖書に親和性を持ったことが分かる一節である。聖書のどこを読んだのだろうか、旧約聖書か新約聖書か？筆者には想像がつかない一節である。かつて江戸で漢訳聖書抜粋の「創世紀」を読み、自分を生み育てたのは両親だが自分を創ったのは「天父」だと知り、実父との絆を超越する論理を見出していた。今度は逆に聖書から父母を想起したのである。

## ワイルド・ローヴァー号に移乗、テイラー船長との出会い

上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換え、異なる二つの船上生活を経験したことが、新島青年に有意義な成果をもたらした。ベルリン号での二十五日は手荒い西洋文明との遭遇時間であった。乗換えたワイルド・ローヴァー号における長い道中は、新島青年の人格を成熟させる「巣ごもり（蚕の時間）」期間であった、と筆者は推測する。特にテイラー船長との「出会い」、この船長と一年余り、時間、空間を共にしたことは他に変えがたい幸運であった。天の采配（プロビデンス）というべきか。

このワイルド・ローヴァー号における長い巣ごもり期間に、新島青年は英語力を増し、キリスト教信仰を深めた。それは西洋文明、近代市民社会へのオリエンテーション期間となったと筆者は考えている。

テイラー船長（Horace S. Taylor　一八二九－一八六九）との出会いの雰囲気を伝えるのが、上海から福士卯之吉宛に出された次の英文書簡である。英語の間違いを含めて原文通り引用して置く。

[To Fukushi Unokichi] [August 10, 1864]

I think new captain is much better than old captain. I tell to new captain it 'As you see me, I am very block, but I wish go to Amerika, and I wish to read much books. Please! Let me reach my *aim* he answerd yes, and he had laughed with good face. I firt understood duty of servant, but I have to day more time to read a book after made any thing in this new ship, and captain coll cloats-boy, and commend to him to make my cloats and trausers.

10d July, ganti 1 year.

（『新島襄全集6』、三頁）

なぜ手紙を英文で書いたのか。早々と西洋かぶれしたキザな青年になったからではない。当時の日本人には英語は通じない。英文はいわば暗号通信のようなもので、脱国を手伝った福士にも迷惑を掛けないよう、双方の安全保障のためであろう。文章から新島は基本的な英作文の力を具えていたことが分かる。

内容としては、まず脱国の目的が明示されている。船長にアメリカに行きたい、英語の本を沢山読みたい、と訴えた。それがテイラー船長に通じた時、船長の顔を見るとニコニコしていた。労働の義務を果たした後の余り時間で勉強できそうは確信をえた。初対面の時からテイラー船長と良い人間関係が生まれていた空気が伝わる手紙である。

別の箇所では、「此の船頭は甚（はなはだ）立派なる人にして、恰も画きたる関羽の如し。船頭吾を呼てジョーゼフと名（なづ）く、且つ吾に船頭部屋の掃除及ひ給仕等の役目を言付けり」（「箱楯よりの略記」、『新島襄全集5』七三－七四頁）と書く。

テイラーは立派なあごひげを蓄えていたから関羽髯の武将を連想したのであろう。二十一歳の新島が出会った時、テイラーは三十四歳であった。兄貴のような存在だったと回想している。

## ワイルド・ローヴァー号での生活

さて「航海日記」のなかに出てくる英語は、曜日、地名、人名などの単語レベルの表記は散見できるが、英文は、七月十一日に三つ、八月十一日に二つあるのみである。前者はワイルド・ローヴァー号乗船二日目の文でここに、I shall call your name joe. とある。船長の言葉を忠実に筆記したのであろう。

ファースト・ネームで呼ばれたことが分かる。新島は船長をどう呼んでいたのだろうか。キャプテン・テイラーだろうか。いずれにせよタテ社会の人間関係にドップリ浸かって育った新島青年が、年齢差に関係なくファースト・ネームで呼び合うアメリカ社会の人間関係の風通しの良さに、ほどなく気付いたはずである。

後年書かれた半生記「私の若き日々」には船上生活の様子が手際よくまとめられている。

> 航海中の私の仕事は船長の食事の給仕をし、船室をきちんと整えることなどであった。船長の仕事がない時は、よく〔マストの〕綱を引く仕事もした。航海中もっとも楽しかったことは、船長とともに毎日、船の位置を計測することであった。彼は私には非常に親切で、自分の弟のように接してくれた。私に対して一度

も意地の悪い言葉を吐かなかった。

船中の誰もが、私に気持ちよく接してくれた。私は船首にある水夫部屋へ行って船員たちに会いたい、とよく思ったが、許してもらえなかった（『新島襄自伝』、六九－七〇頁）。

テイラー船長は、新島が優れた青年であることを見抜いた。新島が航海術を心得ていて、数学もよくできることも知る。サイン、コサインを用いた計算もできたので、テイラー船長と測定値から船の位置を計算する競争を楽しんだりして、時間を過ごしていた。これまであまり言われていなかったが、私は、船長室付きとなった新島がこのテイラー船長と一年以上暮らした意味は大きかったと思う。信仰もあり能力も高い良質のニューイングランド市民である船長から、アメリカ文明の感化を知らずしらずに受け、二人は得難い人間関係を築いたのであった。

## 洗濯する青年

以下はすでに書いた話であるが（拙書『のびやかに語る新島襄と明治の書生』参照）、新島青年の人格の熟成を示す例なので改めた紹介する。ワイルド・ローヴァー号においても洗濯の記述が二度書かれている。

元治二年〔慶應元年〕正月元旦

古郷のけさは如何なる色ならん　つらき勤の春も知らまじ

元旦に衣そそくは如何なるぞ　去年（こぞ）の旧（ふる）あか洗抜とて

ここには自分の服を自分で洗うのは当然であり、元旦の日に洗濯をする自分の姿をユーモアを漂わせて詠うゆとりが現れている。そして両親は「よもや息子が元旦に洗濯するなどとおもってもいまい」とむしろ誇らしげに詠っている風情さえみえる。

〔一八六五年〕五月十七日（水）

今暁四時より六時迄雨降る。雨水を取り我が衣を洗えり。且ツ船主の下衣、褌（ふんどし）、枕覆等を洗えり。午後二時に又雨降れり。

このように淡々と自衣のみならず船長の下着まで洗濯したことをさりげなく書けるようになっていた。

後日新島襄は、この時の経験を、アメリカで苦学する蔵原惟郭（くらはらこれひろ）を激励する際、書簡でこう伝えていた。

御労働中甚だつらき事もあるべし、…労働は人生の良薬なり、苦難は青年の業を成すの階梯なり。小弟昔時労働せし事一年余、又人の糞汁迄洗いし事あり。是等の事は今日にとり小弟を益する殊に甚だし。愛兄よ忍ぶべし。…（蔵原惟郭宛て明治十八年五月三十日書簡『新島襄全集　3』）と。

新島は船長の糞汁まで洗濯する激烈な経験をしていたのである。それを立腹もせず屈辱感も持たずに出来るようになっていた。このことは、新島青年とテイラー船長が良好な人間関係を築いていたことを示している。またそれは肉体労働に従事することが、主人と奴隷の身分制を意味するのではなく、対等な人格が契約によって仕事

をする近代社会の形式であることを体験させていた。

書簡はさらに語る「人労して初めて黄金（こがね）の貴きを知る。日本の乳臭書生、多くは金の貴きを知らず。乞いさえすれば事は容易に成る可しと思わらるには甚だ困り候。…」と（同書）。これは過去の自分へ反省の言葉でもある。かつて函館修学の時、持参金の九四パーセントを「港の怪物」等に浪費した際も、他人事のように「嗚呼我なんぞ金に縁なきや」とつぶやいていた乳臭書生、ベルリン号では自衣の洗濯さえ蔑視していた乳臭書生は、今や「労して初めて黄金の貴きを知る」ことができた。そして、いつしか文明市民に成熟していたのである。なお、このようなモラルの在り方に関しては後述するT・S・アーサーの小説が得意としたテーマである。小説『人生の指針』の影響も考えられる。

## 英語学習

ところで新島襄はアメリカ上陸に際して、「日本脱出の理由」という長く見事な英文エッセイを書いた。そこに示される英語力を、いつ、いかに高めたか。またそこで語られるキリスト教信仰をいつ深めたのだろうか。日本国内で新島が深い信仰を宿していたとは、筆者には考えられない。それらはワイルド・ローヴァー号に乗船中に生まれた変化であろう。それ以外の機会はなかったと思われるからである。

英語学習についての記述は「航海日記」にはない。またそこに書き残された英語文章は数行あるのみである。つまり証拠付ける情報はほとんどない。しかしこの期間に何らかの方法で英語力を磨いた筈である。

英会話は日々、耳学問として学習し上達したといえる。読み書き能力はどうか。これに関してヒントになりそうなのが、新島がボストンで船を離れる時の持物リストの中ある七冊の書籍である（『新島襄全集　5』、六六頁）。

それらは英文聖書、漢訳新約聖書、漢・英文法書（上下二冊）、中国地理、算数書、小説『人生の指針』の七冊である。

ワイルド・ローヴァー号に移乗して41日目の「航海日記」には、

八月九日〔一八六四年九月二十一日〕半〔晴〕
甲比丹、予にバイブルを与へり（岩波文庫『新島襄自伝』、一一三頁）。

とあるから、英文聖書はテイラー船長からの贈り物である。
また、

十一月八日〔一八六四年十二月六日〕Monday
今日、我れ余の小刀を八元にて甲比丹に売却す（同、一一六頁）

とあるが、これは漢訳を買うためであった。「香港で中国語の新訳聖書を一冊買いたかったが、持っていた日本のお金が通用しないことがわかった。そこで船長に小刀を八ドルで買ってもらいたい、と頼んだ。その金を手にいれてからしばらくして、船長は私が中国人の給仕と一緒に市内見物のために上陸する許可をくれた。それで私は中国人の書店で新約聖書を購入する好機を得た」（「私の若き日々」『新島襄自伝』、六八頁）と。

英文聖書をもらった三カ月近く後に、なぜ中国語の新約聖書を購入したのだろうか。英文よりも漢文に慣れており、英文聖書の読解に併用するためであろう。こうして聖書をテキストとして、新島の英語読解力は高められたと考えられる。持物の中に漢・英文法書（上下二冊）があるのは、そのための道具として香港で入手したものであろう。二つの聖書を対比して解読する時の必需品だったと考えられる。

わずかの手掛かりから推測するしかないのであるが、このことは聖書が英語読解力向上の教科書の役割も果たすともに、キリスト教信仰を深めさせたと考えられる。もしこの現物があるならば、その書き込みは、新島の信仰と英語力の進展を追跡する貴重な資料となろう。それにしても武士の魂といわれる刀を手放して聖書を買ったことは象徴的である。過去の武士世界からの決別と新しく西洋文明社会への参入、新島襄の変身を象徴する行為であった。

もう一冊の持物、小説『人生の指針』とは、「航海日記」のリストに「1-Story, finger post」とあるものである。今年、二〇二一年七月の新島研究会例会の三好彰氏の報告によって、この表記が T. S. Arthur, *Finger Posts on the Way of Life*, 1853を指すことが明らかにされた。いったいどんな小説で、なぜこれが新島の持物の中にあったのだろうか。

辞典類で著者のT・S・アーサー（一八〇九－一八八八）について調べてみると、今のアメリカでは忘れ去られているが、十九世紀、中流階級にもてはやされた人気作家であった。南北戦争前にもっとも読まれていた女性月刊誌 *Godey's Lady's Book*, の常連寄稿者であり、一八五三年からは自分で雑誌 *Arthur's Home Magazine* を創刊し、死ぬまで編集に携わったという。作品は、結婚や家庭生活の手引き、商売を志す若者向けの教えなどの物語風ガイドブックといったものであった。アメリカ中流階級に尊厳と上品さを植えつけ、強欲な商売を非難する

等、社会的道徳律を普及させた作家であったという。

新島がこの本をどのようにして手にいれたのだろうか。自分で買ったとは考えにくい。誰かから贈られたとすると、テイラー船長からであろう。英書購読のテキストのひとつだったのではないだろうか。なお今日、*Finger Posts on the Way of Life* は、インターネット上に公開されており、無料でダウンロードできる。

推測するに典型的な中流階級のテイラー船長は、アーサーの本や雑誌を持って乗船していた。そして新島の英語学習熱に応じてそれらをテキストしたのではないか。そしてそれは英語力増強だけでなく、一九世紀中葉のアメリカ中流階級、クリスチャンホームのモラルを伝え、結果的に新島を感化したことが考えられる。

## キリスト教文化への自然体の感化

キリスト教信仰はいつ、いかに深まったのか。マックス・ウェーバーの宗教社会学では宗教における原理忠誠（教理による救済）、人格忠誠（人による救済）、組織忠誠（制度による救済）が論じられている。荒っぽく言えば、その宗教の原理・教条に賛同する者、その宗教を導く人物に共鳴・帰依する者、社会集団としてのその宗教に同調する者がいるという。新島襄の場合、聖書への関心があるうえに、何にも増してテイラー船長という人格の感化力が大きく作用したのではないか。

テイラー船長はバプティスト派の信者であったが、聖職者ではない。キリスト教を信じている「在家の信徒」である。そのテイラー船長が日常的に自然体で振舞う所作、言動から感化されたのではないか。ワイルド・ローヴァー号での一年余りの新島襄の生活は船長室付きの雑用係であった。船長と日常の時間、空間を共にしたのである。そこで目撃した船長の言動や宗教的儀礼（例えば食事前の祈り）はアメリカ文明の生き証人、近代市民の

良きモデルであった。信仰もあり能力も高い良質のニューイングランドの市民である船長から、アメリカ文明の力を知らずしらずに受けて生活した。まして憧れのアメリカ文化である。それは説教臭い教導ではなく無言の感化、自然体の影響であった。このこともかえって良かったのではないか。

テイラー船長がなぜ聖書をプレゼントしたのかを推測してみよう。船長が宣教しようとしたからではなく、むしろ新島襄の方の求道意識がそうさせたのであろう。新島がキリスト教についてのナイーブな質問を次々するので、神学者でもない船長はバイブルを自分で読むようにと与えたのかも知れない。ともかくそれまでに二人の間でキリスト教についての会話が進行していて、新島襄の本気度を感じたから、聖書を贈呈したのであろう。

船長との間でキリスト教そして信仰に関してかなり共通した意識を有するようになっていた。それを示すひとつの証拠が、テイラー船長宛に書いた新島の次のメモである。

船がボストン入港後、船長は早々に実家に帰ったりしたが、入国できない新島襄は三カ月近く船内で悶々とした時間を過ごすことになった。その前後の頃と思うが、新島襄がテイラー船長に密かに渡したメモが残っている。拙い英文で、新島のアメリカ入国と船主ハーディー氏による就学援助を勝ち取るための助力を嘆願したメモである。この「嘆願メモ」はA・ハーディー氏の眼に触れないようにテイラー家に保管されていたが、十七年後、テイラー未亡人からハーディー家に提供された。三男のA・S・ハーディーが『新島襄の生涯と手紙』一八九一年、を書くため資料集めを始めていたのであろうか（Paragraphs written for Captain Horace S. Taylor in 1865 en route to Boston『新島襄全集6』三七〇頁、日本語訳は『新島襄全集　10』一八－二〇頁）。

メモの中でいう

私はどうやら私の大目的を達成しえないのではないかと心配していることを申し上げなくてはいけません…ああ、私はみじめな愚か者です。あなた以外にわたしを救って下さる人は誰もいません。そういうわけですから、私は心の底からお願いします。私の目的を達成できるように、どうかよい道を示してください。目的を達成させて下さるならば、私はあなたのご親切と思いやりを絶対わすれません。死んで墓に埋められましても、私の魂は天国へ行き、神様にあなたのことを報告し、神が真実をもってあなたを祝福なさるようにいたします。…（北垣宗治訳『新島襄全集　10』）と書く。

この「嘆願メモ」で注目に値するのは、もし大目的を実現できたならば、自分は「死んで墓に埋められた時も、私の魂は天国へ行き、神様にあなたのことを報告し、神が真実をもってあなたを祝福なさるようにいたします」と、キリスト教的言質で埋められていることである。いつしかテイラー船長と新島襄は信仰を共有する次元に達していたのである。付言すれば、やがてこのメモは「日本脱出の理由」の作文の内容に反映されていった。

## 「日本脱出の理由」はいつ、どこで書かれたか

この問題をいちばん詳しく精査したのは太田雄三氏の研究である（『新島襄』ミネルヴァ書房、八六―九一頁）。通説が矛盾を含んでいることが明らかになった。以下、筆者なりの整理をし、一つの解釈を試みる。

A・S・ハーディー（A・ハーディー氏の三男）が書いた新島の伝記『新島襄の生涯と手紙』の説明では、七月二十日に船がボストン到着してほどなく、船主のハーディー氏が船の見聞に訪れると、テイラー船長からアメリカで教育を受けたい日本人青年を連れてきた話を聞かされた。その青年を引き合わせが、英語会話が通じなかっ

た。そこで船員宿に泊まらせて文章にさせ、それを十月十一日に受け取った。出来上がった手記の内容に深く心を打たれたハーディー夫妻は新島を引き受けることにした、という話になっている。これにしたがえば、十月十一日以前に船員宿で書いたはずであるが、そのような史実は見当たらない。

「航海日記」は

〔一八六五年〕十月十一日

昨日、船ワィルト・ロワル　ストリームを得たり

今日午前、小蒸気船に乗移りボストンに上陸せし、即時、船頭H・S・テーロルと手を別てり。且つ船番、吾れを誘い、ポルチェス街〔Purchase Street〕の船子家〔Sailor's Home〕に来たらしめり。

と記す。

新島襄は十月十一日にワイルド・ローヴァー号を下船し、テイラー船長とも別れ、その夜は船員宿に泊まったことを示している。当時の新聞記事によれば十月十一日、テイラー船長のワイルド・ローヴァー号はアラバマ州モービル向けに出港している。

『新島襄全集8』年譜編、では、十月十一日から船員宿に泊まり、三日後の十四日に手記を書き上げたとした。なぜ三日間かというと「箱館よりの略記」に「波士頓（ボストン）の船宿に三値日之間逗留せしめ」（『新島全集　5』七九頁）

とあるからである。これが今日の同志社で一般的に語られている説明である。しかしこの説には大きな弱点がある。もし、手記の出来が悪く、ハーディー氏が引受けを拒否したらどうなるか。船長も船も去ったボストンで、新島は難民状態で放置されることになる。テイラー船長も新島襄もそのような選択はしなかったはずである。

他方『新島襄の生涯と手紙』の記述は、脚色され過ぎた不自然さが感じられる。例えば「〔ハーディー〕夫人の質問のひとつひとつに対し、彼の反応は短い音声だけ」とある。一年三カ月も米国人船長らと暮らした新島には、抽象論理的な話はともかく、普通の英会話能力は十分あったであろう。

筆者の想定する経緯はこうである。ボストン到着後、先にも紹介した新島の「嘆願メモ」がテイラー船長に手渡された。その後、ワイルド・ローヴァー船内で、テイラー船長の応援を得ながら手記は書き上げられた。その確たる証拠はないが、情況証拠はいくつかある。そしてハーディー氏が再度ワイルド・ローヴァー号を訪れた際に、その手記は渡された。一読して心を動かされたハーディー氏は新島を引き受けることにした。十月十一日は新島襄にとって、船にもテイラー船長にも別れを告げ、晴れてアメリカ入国を果たした日であった。ただ直接ハーディー家には行かず船員宿にて過ごしたのである、と解釈する方が合理的であると思うのである。

ここでおこる疑問はなぜ数日を船員宿で過ごしたか、である。筆者はハーディー家の都合だったと考える。ハーディー家のようは指導者階級のクリスチャンホームではホームの経営に夫人が強い権限を持っている。異国から来た一青年をハーディー家に引き取るには夫人を説得し、同意を得る必要があったと思われる。それらに数日を要したのではなかろうか。

## テイラー船長の執筆サポート

「日本脱出の理由」の作成には、テイラー船長の筆が加わっていた、少なくともかなりの作文指導がなされていたと筆者は推定している。

先ほど紹介した新島襄がアメリカ入国とハーディー氏の就学援助を願ってテイラー船長に渡した「嘆願メモ」は、拙い英文で訴える、

私はどうやら私の大目的を達成しえないのではないかと心配していることを申し上げなくてはなりません。それは以下のような考えによるものです。

この船の持主は私に非常に親切にして下さることでしょうが、その方は私があの大目的を達成するまで私を学校にやって下さるわけにはいかないでしょう。なぜならその方は私のために金を無駄使いすることになるからです。私の推測では、その方はひと月に少なくとも二十ドルを私の衣食と、学習に必要な経費として使うことになるからです。その方がもし私のためにそんな多額の出費をなさるのであれば、私に相当な仕事をいいつけられることでしょう。私はほとんど一日中働かなくてはなりません。働くことをいとうというわけではありませんが、そうなれば勉強時間を大いに取られることになるでしょう。もし十分な知識を獲得できないのであれば、どうして日本に帰り、藩主や家族や友人に顔を合わすことができるでしょうか。…

私はそのことについて頭がとろけるほど心配しています。そのような思いが頭に浮かぶと、読書は全く手につかず、何事も楽しくはたせなくなり、まるで気がふれたように、長い時間あたりを見まわすばかりです。それほどにまでこの問題は私の心を混乱させました。…ああ、私はみじめな愚か者です。あなた以外に私を

救って下さる人は誰もいません。…（『新島襄全集　10』、一八－一九頁）。

このように新島に泣きつかれた時、テイラー船長が思い当たったのは船主ハーディー氏をその気に仕向けることであったであろう。新島を船主と結びつけるべく作文を指導する。航海のつれづれに新島から聴かされたであろう日本脱出の勇敢な行動とその動機を文章にまとめさせ、みずからもその添削を手伝った。そして完成させたのが「日本脱出の理由」であった、というのが筆者の推定である。

実際、『新島襄全集　6』に収録されている新島の「嘆願メモ」の文言のいくつかが、『日本脱出の理由』の中で、洗練された英語となって使われている。テイラー船長の添削であろう（具体例については、拙書『明治思想史の一断面――新島襄・徳冨蘆花そして蘇峰』、六九頁を参照されたい）。

その他、テイラー船長が助力したであろう状況証拠がある。第一に、テイラー船長は、新島が渡米就学の目的を持っていることを知ったうえで乗船を引き受けたのであり、その処遇に責任を感じ、何とか無事にアメリカに上陸させたいと考えた筈である。第二に、入国させるに相応しい青年とテイラーも判断していたからである。船長室で雑用をする新島襄を見ていて、その人柄が分かったし、一緒に測量や船舶の位置計算ができるほど高等数学ができ、学問する能力をもつことを見抜いた。いわばテイラー船長の一次面接試験に合格して、推薦に値する人物だったのである。第三に、テイラー船長は船主ハーディー氏の人物をよく知っていたから、どう訴えると効果的かを心得ていた。大変熱心な新教徒であるハーディー氏の泣き所をつく作文の指導ができた。これらが手助けしたことの情況証拠である。

## 誇張された求道の旅、入国用のエントリー・シート

「日本脱出の理由」において新島青年は、江戸を発つときからキリスト教を求めての旅だった点を強い調子で書いている。「〔抜粋聖書で創世記を読み〕この時から私の心は、英語の聖書を読みたいという思いに満たされたので、箱館〔函館〕に行って、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。そこで藩主と両親に対して箱館に行かせてほしいとお願いした。彼らはそれを許さなかった。（中略）私は自分の願いを持ち続け、神に向かって、『どうかお願いですから志を達成させてください』とひたすら祈っていた」。その後幸いにも函館行の洋式帆船に乗ることができたので、「私はいくらかの金と少しばかりの衣服、其れに僅かな書籍とをたずさえて家を出た。もしこの金がなくなったらどうやって衣服をまかなうのかを考えることもなく、ひたすらこの身を神の御手にゆだねた」。「箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけられなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った」（『新島襄自伝』 二四－二五頁）と。

これはあまりにも完璧なキリスト教求道者としての旅姿である。二十五両の大金をもって江戸を出港していたのに「いくらかの金」と書く。函館行きの途中で「港の怪物」と出会って大金を失った事実とはあまりにも違う話である。所持金をなくして進退きわまったのは函館に着いて以降の事情である。そのために、「この身を神の御手にゆだね」というよりも、一か八かの運命を賭けて、「私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った」と考えられるのである。

「日本脱出の理由」の記述は、新島において自己欺瞞ではないにせよ、かなり誇張されている。今日でも大学生が就職活動でエントリー・シートを書く時には、相手企業をもち上げ、自分の動機を企業向きに強調し忖度するが、新島にとって「日本脱出の理由」はアメリカ入国のためのエントリー・シートであった。結果としてこの

作文は大成功し、ハーディー氏の心を捉え、アメリカ入国を実現させたのであった。ただし、その後の新島襄の人生はこのキリスト教宣教の道を立派に実行したことを忘れてはならない。

付言すれば、二度目の訪米時にハーディー家の別荘で *My Younger Days*（「私の若き日々」）をまとめた際、新島襄は、「日本脱出の記」の誇張した記述と矛盾を来さないように苦心しながら、以前よりも事実に忠実な半生記をまとめるという細心の作業を行ったのであった。

## その後のテイラー船長と新島襄

アメリカ入国後も、新島襄はテイラー船長一家から家族の一員のような扱いを受け交流を重ねた。フィリプス・アカデミーに在学した一八六六年の最初の夏休みには、テイラー船長みずから新島をアンドーヴァーまで迎えに行き、チャタムの実家で過ごさせていた。その年の十月には、テイラーが中国に出帆する直前に、新島をボストンに呼び出し、歓談の後、上等の外套と帽子を買い与えた。一八六七年の夏休みは、テイラー船長の実父の家で過ごした。一八六九年四月二十八日にはテイラー船長の両親の金婚式に招かれて一泊した。そして一八六九年夏休みもテイラー家で海遊びなどを満喫したのであった。

その四か月後、悲劇が起こる。テイラー船長が不慮の事故で急死したのである、享年四十歳であった。それを知った時の新島の衝撃の大きさは以下の日記になまなましい。

一八六九年十二月十三日、月曜日朝の事だった。一人の子供が黄色い紙片を私の許に持ってきて、手短かに、宛名人をたしかめた。それはテイラー船長の死を知らせる電報だった。非常に驚いた。どうしていいか

わからなかった。全然口がきけなかった。椅子に掛けたまま、『こんなことは信じられない。夢だ。そんなはずはない。ありえないことだ』とつぶやいていた。涙も、言葉も出なかった。…でも船長のきょうだいたちに会ったとき、大声で泣き出してしまった。…はげしく泣くのみだった。船長がなぜ私にとってかけがえのない人であったかを、どう表現したらよいだろう。私はシャンハイで彼の親切な手でうけとめられたのであった。シナ服を与えた上、縫い方を教えてくれた。航海術も教えてくれた。辛抱強く話しかけてくれたし、いつも私のあやまちを許してくれた。私にひどい言葉をかけたことは一度もなかった。それ以後私の親代わりとなって下さった方に私を紹介してくれたのも船長だった（『新島襄全集　6』六四－六五頁、『新島襄全集　10』、一〇七－一〇八頁）。

これほど新島青年にとってテイラー船長は大きな存在だったのである。この日記にあるように、上海からの船上生活で、二人は親子のような深い絆で結ばれていた。新島襄の人格的成熟はテイラー船長に負っていた。それ故にアンドーヴァーでヒドン家に下宿した時には、ニューイングランドの市民に見劣りしない紳士として振る舞うことが出来たのであった。

## むすびにかえて

幕末という時代は、もっとも意欲的でもっとも良質な青年たちを逸脱行動に走らせた時代であった。このような行動に出られるのは青年の特権である。新島襄もそのようなひとりで、試練を覚悟し不安におびえながらも、決然と、外国という未知の深みに漕ぎ出した。破たんの可能性をはらみながら「密出国」という人生を賭けた実

存的な旅に出発したのであった。その新島襄において出国時の恩人はベルリン号のセイヴォリー船長であり、アメリカ入国ならびに人格的成熟（キリスト教信仰とニューイングランドの市民性）の恩人はワイルド・ローヴァー号のテイラー船長であった。こうして異なった二つの船内での「巣ごもり期間」が、封建武士をキリスト教を信ずる文明紳士に変容させたのであった。